EYELESS IN GAZA

Rust Red September
(UK) Cherry Red B RED 50

Martyn Bates, Pete Becker

シングル「New Risen」に続いて発表されたギャザの通算5作目のLP。前作「Pale Hands～」が、ギャザの特質の一つであるヨーロッパ的な耽美性を抽出したような作品だったのに対し、今回は全体に再び3作目の「Drumming～」でみられたポップ的な側面をより強調したような展開を見せている。特に先のシングルにも含まれていた2曲をはじめとしたA面は、その傾向が強くしなやかな表情を示すギャザの姿を見ることが出来る。またB面では、従来のギャザ特有の深奥い叙情性を湛えた甘美な味付けのネオ・ポップ的世界を描写していて、彼らの繊細な感性と豊かな表現力が十分発揮されてもいる。僕もそうだが、多くのギャザ・フリークス達は、またまたこんなギャザの奥行きのある世界に魅わくされることは明らかだ。「Pale Hands」に見られた青白い炎の輝きも、このLPの枯葉色の大地の湿り気も、どちらもギャザの全てであり、あるいはギャザの一つの表情でもある。9月の木々や大地は、のびやかでしなやかな香りを放つが、また、数ヶ月後に必ずおとずれる長い冬の季節を耐えぬく準備を始めることも又、忘れてはいない。ここでのギャザは、そんな自然の多感な感情に、自分達の感性を重ね合わせることに、時に神経を研ぎ澄まし、時に素直に向き合って、短い秋を歌い続ける。ベン・ワットやトレーシー・ソーンやフェルトのさり気なさも良いが、ギャザの独特の深みもまたチェリーレッドを代表するに値する素晴しいものだ。

(石川真一)